

房総における算学の展開

墓碑石資料を通してみる

川崎喜久男

The Development of Arithmetic in the Boso Peninsula: Based on the Evidence from Gravestones

はじめに

①算学普及の実態

②発見された算子塚からいえること
おわりに

【論文要旨】

房総における算学の、特にその普及の実態についての従来の調査と研究は、必ずしも十分ではないと感じられた。

そこで房総全域とその隣接地域の寺院堂庵の墓地、共同墓地などを回り、そこに存在する算字を学んだ門人(算子)たちが、報恩感謝の気持ちから建立した算学師匠(算師)の墓石(算子塚)を発見することで、普及の実態を探ってみた。

結果、一四四基の算子塚を発見することができた。複数の算子塚の存在する算師もいるので、確認することができた算師の数は、一四二人である。このうちの七九人は、従来は算師としては知られておらず、新たに確認することのできた算師である。これらの算師の没年から判断して、算学は一八世紀の末ごろから房総の地に普及し始め、一九世紀初頭からなおよ一層の勢いで普及していったことを知ることができた。

また、これらの算子塚から、算子塚建立に芳志を寄せた約四〇〇〇人の算子名を確

認することができた。出身地が一緒に刻まれている算子も多く、門人圏を知ることができる算学塾も多数にのぼった。刻まれている算子名と、「持高名前帳」や「戸籍人別帳」が一致して、算子の家の、村内での階層を判断できる算学塾も見つかった。

算子塚は房総東北部に多く、多数の算師の存在が確認できた。幕末・維新期の算学門人圏は、少なくとも房総東北部をもれなく覆っていたように考えられる。その際、国郡や支配領主の違いは、通学にまったく障害となっていないこと、また算額の寺社への奉掲は、多くの場合、算師が算学を学び始めた若年のころの所業であることをも知ることができた。

そして石造物資料が、算学史の究明にも大きな役割を担ってくれることを実証した。しかし、この貴重な石造物資料が、墓地改葬・改修によって次々に消え去っている。一刻も早く調査し、記録を残す必要を痛感した。